

浄信寺通信

平成24年夏号

名古屋市市中村区名駅五丁目二〇番三
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和
TEL (〇五二) 五六一一・一七三六
頒布価格年 千三百円
(檀信徒会費)

八月十五日は、ほんとうに

終戦記念日？

今年もまた、八月十五日がやってくる。「この日は何の日ですか？」と問えば、大多数の方が、【終戦記念日】と答えるであろう。毎年政府主催



の全国戦没者追悼式が、天皇・皇后も出席して開催される。近年遺族の高齢化が進み、戦争の記憶も徐々に風化しつつある。

我々日本人には、一九三二（昭和六）年の満州事変から、一九四一（昭和一六）年の真珠湾攻撃に始まる「太平洋戦争」の終結した日と記憶されている。

しかし「太平洋戦争」と言う呼び名にしても、戦後の連合国軍最高司令官総司令部が、当時の日本側の正式名称であった「大東亜戦争」を「太平洋戦争」へ強制的に

書き換えさせる検閲によって定着した名称である事は、意外にも知られていない。

京都大学のメディア文化論研究室の佐藤卓己（さとうたくみ）氏の著書『八月十五日の神話 終戦記念日のメディア学』（ちくま新書）には、なぜこの八月十五日が、大多数の日本人に、常識として【終戦記念日】として根付いてしまった経緯を、詳細な資料を駆使して述べられている。

佐藤氏によれば、「八月十五日」は終戦記念日「は何ら必然性のあるものではない。歴史的事実を述べれば、八月十四日に、米英にポツダム宣言受諾を通告して「大東亜戦争終結ノ詔書」が書かれ、玉音放送が録音されたのもこの日である。大本営が陸海軍へ停戦命令をだしたのは八月十六日。（実際には、中国大陸では九月中旬。南方ではさらに長い期間停戦降伏しなかった部隊もあった）更に対戦国のアメリカ初め多くの国では、東京湾に入港した米戦艦ミズーリ号の甲板での降伏文書（休戦協定に相当する）に、内閣を代表して重光外相、

平和公園墓参のご案内

日時： 8月12日（日）
13日（月）

午前8時頃～午後1時頃

修 勤 講 恩 報

平成24年11月9日（金）
午前10：00～
勤行・説教・おとぎ

お説教「仏教と話芸」（住職）



の契約を申し込んだだけでは、契約が成立しないと同様に、「終戦日」としてのグローバルスタンダードとして認知されているのは、休戦協定が結ばれた九月二日である事を初めて知った。

た日の八月十五日が日本人にとって「終戦記念日」の神話になり得たのか？この事についても、佐藤氏は、まことに興味深い事実を提示されている。

佐藤氏は、こうした神話形成にラジオというメディアが寄与が大きい。ラジオは、「内容を伝える」活字メディアと異なり、「印象を表現する」特性が強い。玉音放送の際も、人々は「内容」より「印象」に集中し、その「印象」が神話形成を後押しした。人々の記憶に残っているのは天皇による朗読の部分、すなわち「印象」の部分だけで、解説の部分、つまり「内容」の部分はすっかり忘れられてしまっている。

「皆様御起立を願います」ではじまる玉音放送は「儀式」としての性格を持っていた。儀式へ国民全体で参加した、という直接的な感覚こそが、「集合的記憶」として人々に残ったのである。そしてこの事を増幅・強化したのが当時の新聞、雑誌などのメディアであった。

更に佐藤氏は、日米で歴史史観の違いとでも言うのか、アメリカ側では、日本の「対米覚書」（最後

通牒）によって戦争が開始され、降伏文書で戦争が終わった。文書主義的歴史観である。反対に日本では、彼の十二月八日のあの有名な「臨時ニュースを申し上げます・大本営陸海軍部発表・本八日未明西太平洋に於いて・米英と戦闘状態に。云々」のラジオの臨時ニュース放送で、戦争は始まり、「朕、思うに・忍びがたきを忍び・」で終わった。謂わば音声主義的に歴史が語られていると、誠に興味深い事実を提示されている。

山折哲雄氏の「日本の「宗教」はどこへいくのか」（角川選書四九七）には、この佐藤氏も指摘されている事実を紹介しながら、この八月十五日が、我が国の伝統的な「盂蘭盆」の仏事の先祖供養の日付と重なって、戦場で散った英霊達の祖国帰還を祈り、その無念の思いを慰藉（いしや）し、追悼する国民感情に融合して、自らの先祖の霊。即ち「祖霊」と同様に、戦死者を「英霊」として受け入れる新たな「記念日」として日本人に受容されていたと述べている。

八月十五日の終戦記念日なるもの

大本営代表の梅津参謀総長が乗り込み調印し、連合国各国代表が受領確認した九月二日を、「Victory over Japan Day」（対日戦争記念日）としている。東南アジアの諸国も日本軍の武装解除の日、すなわち九月を終戦としている。

八月十五日という日は、前日に録音された天皇による「終戦の詔書」朗読が日本国民に向けてラジオ放送された日ではない。と、述べられている。言われてみれば、その通りである。

下世話な話で申し訳ないが、生命保険のセールスレディに、生命保険

佐藤氏によれば、戦後しばらくは新聞、雑誌、ラジオ等でも、ポツダム宣言受諾の日である八月十四日が終戦の日とされていた。しかし、占領終了後、終戦十周年のイベントが行われた一九五五年ごろから八月十五日に放送された「玉音放送」の神話化されはじめ、東京オリンピックの前年の一九六三年、第二次池田勇人内閣で「全国戦没者追悼式実施要綱」が閣議決定されて、この八月十五日が法的に終戦記念日となったのである。八月十五日と終戦記念日の結びつけは根拠がないだけでなく、歴史も浅いものであった。では何故に、「玉音放送」のなされ

が、「世界標準」からすれば、何ら意味を持ち得ない記念日であると言う衝撃的事実を突きつけられて、ふとこうした現実には、我々日本人の過去・現在の事象についても、珍しい現象では無いのではないのか？そんな思いが脳裏を過ぎった。

※ ※ ※

我々が日頃慣れ親しんでいる『親鸞聖人』の生涯についても、親鸞聖人の娘の覚信尼の孫にあたる、覚如（かくによ）が作成した『親鸞伝絵』（しんらんでんね）に出典をもとめて語る事が多い。親鸞聖人は全くと言っていいほど、自分の事を語っていない。明治の近代歴史学の聡明期には、親鸞と言う宗教家の存在すら、教団が捏造した架空の人物であると、まことしやかに言われた。

この争論に決着をつけたのが、大正十年冬、西本願寺の蔵から、恵信尼

晩年の建長八年（一二五六）から文永五年（一二六八）までの十二年間に、末娘の覚信尼に宛てた手紙である『恵信尼文書』十数通の発見であった事は、既に『浄信寺寺報』で詳述した。

前述したように、八月十五日が法的に終戦記念日となったのは、戦後二十年近く経つてからである。この『親鸞伝絵』も親鸞聖人が亡くなって三十三年後に作成された。かならずしも親鸞聖人の生涯を正確に記述したものととは、言い難い側面も否定できない。

この事について、宗教学者の島田裕巳（しまだひろみ）氏は、『浄土真宗はなぜ日本でいちばん多いのか』（幻冬舎新書）のなかで、「親鸞の場合、その実像が必ずしも明確ではなく、反対に虚像の方が大きくふくらんでいる。それは、開祖や宗祖全体に共通して言えることではあるが、親鸞についてはあまりにその虚像がふくらみすぎているとも言えるのである」と指摘されている。島田氏の論旨の全部を紹介できないが、いわゆる真宗では、親鸞聖人三十五歳の時に越後

に流罪になった『承元の法難』（一二〇七年）について、大胆な仮説を提示されている。

島田氏によれば、当時流罪の対象となった国は、遠流（おんる）・中流（ちゅうる）・近流（こんる）とされ、遠流の地は、伊豆・安房・常陸・佐渡・隠岐・土佐とされていた、法然上人は土佐が遠流の地として定められていた。越後は、遠流の地としては含まれていない、又親鸞聖人が流罪になったと言う事を証明できる資料は、真宗側の資料以外には、全く記載されていない。

そればかりか、この流罪について、真宗の学者が根拠・論拠としている『教行証文類』（きょうぎょうしやうもんるい）の後序記述について、

主上臣下、法に背き義に違し、忿をなし怨みを結ぶ。……中略……罪科を考えず、あるいは僧儀を改め姓名をたもつて遠流に処す。予はその一なり

について、【その一なり】は、流罪になった一人ではなくて、法然の一門の一人と、読む事もできる。と同時に「空師ならびに弟子等、諸方の辺州に坐して五年の居諸を経たりき」と言う文脈も、島田氏は、「こ

の文を読むと、弟子等の中に親鸞自身は、含まれていないように感じられる」と述べられ、親鸞聖人自身自ら流罪生活については、全く述べていない事等を論拠に、【親鸞越後流罪】を遠慮がちな表現で、真宗側が創作した虚像ではないのかと大胆な説を提示されている。

いずれにしても、親鸞聖人の一生は、多くの謎にみちている事だけは確かで、聖人の実像を証明できる史料も皆無である。

ある意味では、島田氏の言われる（虚像の親鸞）その姿こそが、宗祖としての威厳と権威の象徴として、真宗門徒の中で、長く伝承されてきた、これ又【実像の親鸞】の姿であったかも知れない。



佐藤卓己
八月十五日の
神話
終戦記念日のメデア字

CHIKUMA SHINSHO

「先」の戦争の意味を公開の場で冷静に再考するためには、ひとは戦争責任の議論と戦死者の追悼は、その時空を切り離して行うべきだと考える。そのためには、戦後の8月15日の心理を尊重しつつ、夏休み明けに9月2日の論理をもつて考える。

「八月ジャーナリズム」の総決算！
1945年8月15日、それは本当に「戦敗」だったのか？
メディアの検証を通して、戦後日本を問い直す。

読者定価
定価（本体価格B20円＋税）

ちくま新書



「笑う親鸞：楽しい念仏、歌う説教」
伊東 乾 著 河出書房新社 ￥ 2,100

伊東 乾（イトウ ケン）
1965 年生まれ。指揮者、作曲家。
東京大学准教授。著書に、『さよなら、サイレント・ネイビー』など多数。

【要旨】

いきつくところは「笑い」。親鸞が浄土の教えを津々浦々に広めようと始めた念仏、和讃、そして説教：その現在に立ち会い、新しい法要造りに参加した著者が、現代の心の置き所を親鸞に見出す魂の旅。

当寺の報恩講で数年前に講演していただいた、伊東乾先生の最新作。博学・多才な著者が、真宗の「節談説教」に興味をもち、これまた不思議なご縁で、小生及び名古屋教区の仲間と一緒に、親鸞聖人御遠忌お待ち受け法要をプロデュースする経緯や、真宗寺院の本堂が、伝統的な説教のみならず、お経や念仏にとって、優れた「音楽」の器（うつわ）で、みごとにまで響く実証実験を、浄信寺本堂で試みた経緯。

歴史を振り返れば、蓮如は能楽な

どの芸能を活用した布教に意欲的に試み、無数の講を創作し組織した「メディア王」であった、親鸞は話が面白く音楽的なセンスも抜群の人であったに違いない。先人たちが、経験と知識で、民衆の心に響く布教・法要方法を確立していった経緯。

本書に紹介されている、伊東先生の「笑う親鸞」の取材に少なからず立ち会った小生の関わりを含めて、筆者が、真宗・親鸞に新しい視点からアプローチした書籍である。



通称シギリヤ・レディと呼ばれる美女の壁画
シギリヤ・ロック（スリランカ）

光り輝く島

「敬虔な仏教国・スリランカ」周遊の旅

期間 2013年3月25日（月）～4月1日（月）
代金 258,000円 セントレア（名古屋）発着
空港税・代行費・燃料サーチャージ別途
香港経由キャセイ航空利用 全行程食事付き 添乗員

仏教国スリランカ、紀元前3世紀インドのアショカ王は、隣国の島国スリランカ（セイロン）に仏教を伝えました。インドでは仏教が廃れてしまったが、今なおこの国では、70%以上が仏教徒。世界で最も古くから、そして長く続いている敬虔な仏教国と言われている。国民性は穏和で、信仰心に篤く、南国特有のゆったりとした時間が流れています。スリランカの5つの世界遺産を訪れます。ホテルも連泊で時間的には余裕があります。

問い合わせ先：(株)トラベル・サライ（大阪）
フリーダイヤル：0120-408-128（中村）
浄信寺 561-1736

編集後記

今年は寺報をお送りするのが、例年より遅れました。

三月中旬に家内が「クモ膜下出血」で意識不明で救急救命病院に搬送され、二度の脳の手術で、危機状況を経て奇跡的に乗り越え、四ヶ月近くの入院生活から七月中旬に無事社会（坊守）復帰できました。

この間、自坊への電話連絡などでご迷惑をお掛けしたかも知れませんが、色々な想いの四ヶ月でした（住職）